

横井小楠 —その業績と生涯—



▲徳川慶喜肖像写真 (福井市立郷土歴史特別館蔵)

長期にわたる財政難や外国への対応、尊王攘夷運動*の広がりなど、多くの課題をかかえた江戸幕府は、それらを解決するために政治の仕組みを変えなければなりませんでした。文久2年(1862)7月、幕府が将軍後見職に一橋慶喜*、新設の政事総裁職(大老相当職)に松平春嶽を任命したのもその表われです。

14 『国是七条』の建白

松平春嶽が政事総裁職に就任したころ、小楠は幕府への建白書(提言書)を書いていました。それは小楠の建白書類の中で特に有名な『国是七条』です。

春嶽はこの『国是七条』を幕政の方針にして改革に乗り出しました。当時の幕府にとって、これらの一つひとつは幕府の興亡にかかわる大問題でしたので改革に消極的でしたが、同年8月になって、幕府の大目付*岡部長常は小楠を招き、『国是七条』の内容について詳しい説明を求めました。そこで小楠は、天下の人心がゆらいでいる今日、まず将軍が京都朝廷に出向いて尊王の誠を示すことが大事であること、次に各藩の財政を困窮させている参勤交代や大名の妻子の江戸居住をゆるめるか廃止すること、さらに外国の圧力に対処するためには海軍の兵力の強化が必要であることなどを提言しました。岡部から話を聞いた慶喜や老中は、小楠の優れた判断力や考えに大変驚いたそうです。

その後、小楠は一橋邸に参上して慶喜に会い、幕政に関する意見を述べています。翌日、慶喜は春嶽に「昨夜、横井平四郎(小楠)に對面したが、非常に優れた人物でひどく感心した。話の中で、随分難題と思える事例に尾ひれをつけて問うたが、少しも滞ることなく返答した。拙者どもの思っていることより数段上の意見を持っている」

『国是七条』(要約) 文久二(一八六二)年

- 一、大將軍は上洛してこれまでの無礼を謝る。
- 一、大名の参勤交代をやめて述職*に変える。
- 一、大名の妻子を国許に帰す。
- 一、各藩から人材を登用して幕府の役人にする。
- 一、多くの人の意見を取り入れて天下と公共の政治を行う。
- 一、海軍をつくり軍事力を高める。
- 一、自由貿易をやめて官貿易をする。

(村田氏壽著『續再夢紀事』)と話しています。

同年閏8月、幕府は参勤交代制度を改革しました。その主な内容は、参勤は3年に1回でよい、在府の期間も100日にちぢめる、妻子が国許に帰ることを許すというもので、この改革を『文久の改革』といいます。

一方、京都には、幕府の違勅調印などに反対する尊王攘夷派の志士が全国から集まっていました。なかでも、長州藩は三条実美*らと提携して朝廷に働きかけ、将軍の上洛と攘夷の決行を幕府に迫りました。彼らは、慶喜や春嶽が幕府の重要な役に就いたことで、攘夷を実行してくれると信じましたが、小楠については、越前藩邸を訪れた長州藩の桂小五郎*が「この頃世間では、横井小楠は勤王の志がなく天下のためにならないので、今後出会ったら暗殺すると噂している。」と警告しています。

※尊王攘夷運動…幕末に、違勅調印に反対する尊王論(天皇制)と鎖国を堅守し外国との条約に反対する攘夷論(外国人排斥)が結びつき、幕府の専制と開国政策を批判して行動した運動。

※一橋慶喜(1837~1913)…父は御三家水戸藩主徳川斉昭。一橋家を相続し、第14代将軍家茂の後見職(補佐)となる。家茂の死後、第15代将軍となり徳川を名乗る。江戸幕府最後の将軍。

※述職…大名が登城し将軍に領内の政務に関して報告すること。

※大目付…老中の配下で、大名の監視などを行った。

※三条実美(1837~91)…尊王攘夷派の公卿(身分の高い公家)。政変により一時長州に逃れたが、のち明治新政府の大臣になる。

※桂小五郎(1833~77)…幕末期の萩(長州)藩士。のちに木戸孝允を名乗る。坂本龍馬の仲介で、薩摩藩の西郷隆盛らと薩長連合を結ぶ。

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。